

## 6 生徒の英語コミュニケーション能力の向上と評価

(1) 「議論するための発信能力」(評価方法の開発が研究内容の一部)について

- WSAテスト(本校独自開発)に基づく「パフォーマンスの変化」-

### 〔1〕「議論するための発信能力」の定義と評価

本研究開発では、「議論するための発信能力」とは、「身近だが賛否両論のあるテーマ」に対して自分の意見を論理的に伝えることのできる力と定義し、その能力は「流暢さ」・「(綴り・発音・文法の)正確さ」・「(内容の)適切さ」の3つの指標によって表現することとした。そして、この3つの指標をライティングとスピーキングにおいて測定することによって、「書く」と「話す」ことが相乗効果的に向上するプロセスを追跡し、指導法改善の根拠を導き出すことを目的としてきた。

WSAテスト(Writing and Speaking test for Argumentation)は、この目的に向かうための物差しとして使用するものである。

WSAテストの結果とそれに先行する指導との対応は、もう既に述べてある。ここでは、それ以外のスキルごと、指標ごとの特徴について記述し、向上の程度を評価する。

### 〔2〕議論するための「流暢さ」の変化 【図6-1-2-1】

「流暢さ」の指標は、最も客観的な絶対評価となっているので、すなわち最も信頼性の高い指標と考えられる。

この「流暢さ」において、平成14年度入学生(平成16年度卒業生)に関しては、スタートラインから低い数値が示されていたが、その他の学年についてはSELHi指定後の取り組みにおいて確実に能力の向上を反映する結果が示されている。

これは、確実に「流暢な発信型コミュニケーションの能力」、「相手を待たせない議論のための能力」など、本校がSELHi研究を通じて身につけさせたい能力の伸長に成功しつつあることを確実に示唆していると考えられる。

また、一般化することは避けたいが、S.U.P.に基づく指導を前提条件とする限り、この「流暢さ」は、『いったん身につけると下らない(不可逆的)』という傾向が見られる。

その点において、できるだけ「流暢さ」を身につけさせることで、生徒のモチベーションを向上し、その他の「正確さ」や「適切さ」に係わる部分の指導へと移行することで、効果的な指導ができるとも考えられる。

### 〔3〕議論するための「正確さ」の変化 【図6-1-3-1】

「正確さ」では、ライティングとスピーキングとの傾向を対比的に見るために「誤文法率」を指標とする。そもそも文法エラーは、より多く「書く」あるいは「話す」ことで、より多く観測されることになってしまう。したがって、エラーの「率」、すなわち「エラー数/産出語数」で計算することとした。

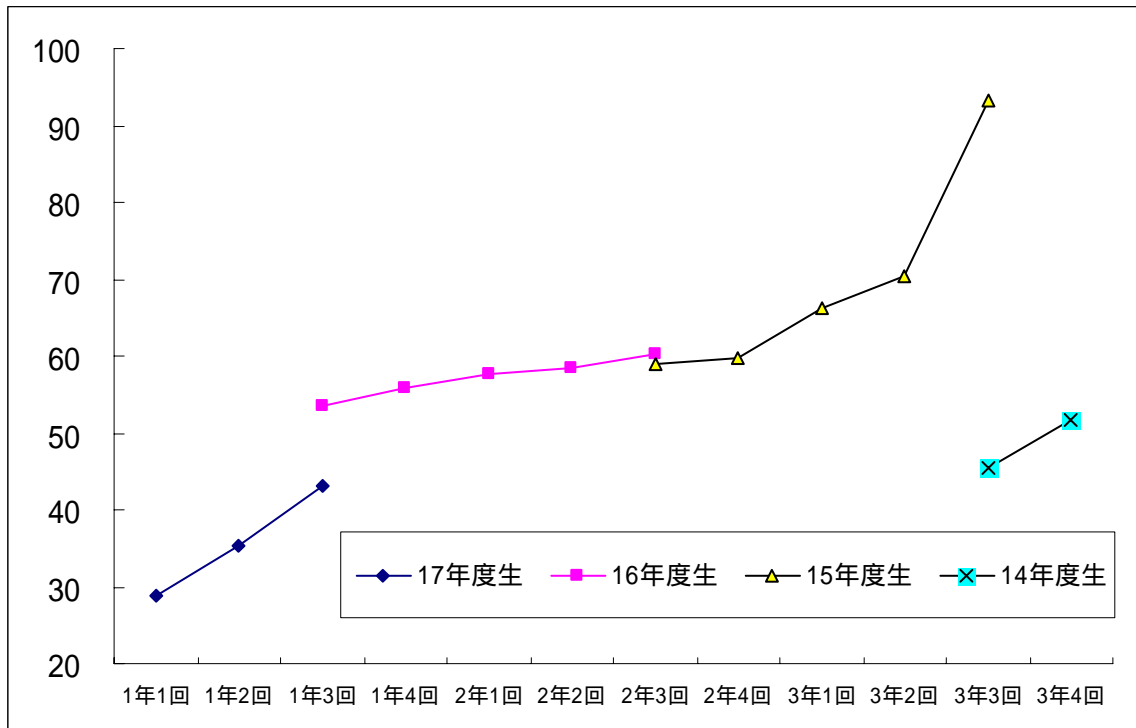
もともと、明確な目標値は存在せず、限りなくゼロに近いことを志向する。

とりわけ学年ごとに対比すると、学年が上がるにつれてエラー率は下がるという傾向にある。この点において、SELHi研究における取り組みの成果は、上がっていると評価する。

しかし、コミュニケーションであることを評価の最優先として、「多少のエラーは許す」というスタンスをとるのか、あるいは、やはり「限りなくゼロに近づく」ことを是とするのか。今後の指導において、重要な論点が呈示されている。

図6 - 1 - 2 - 1 「流暢さ」における「パフォーマンスの変化」

スピーキングの「流暢さ」



ライティングの「流暢さ」

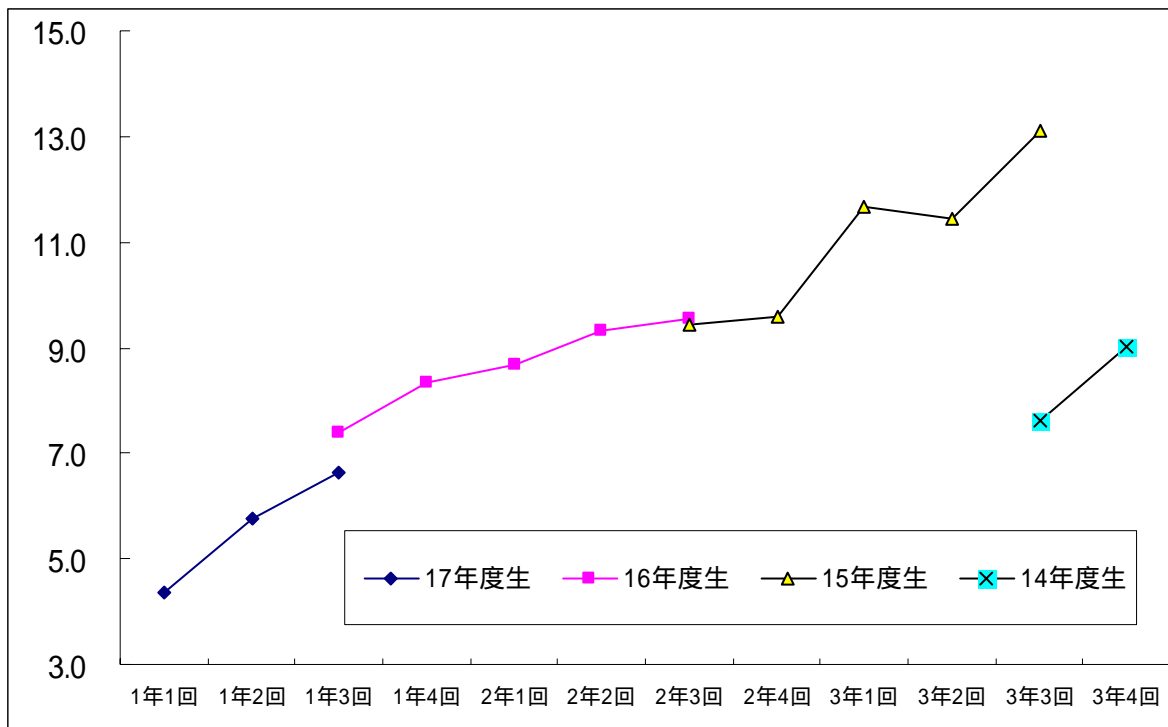
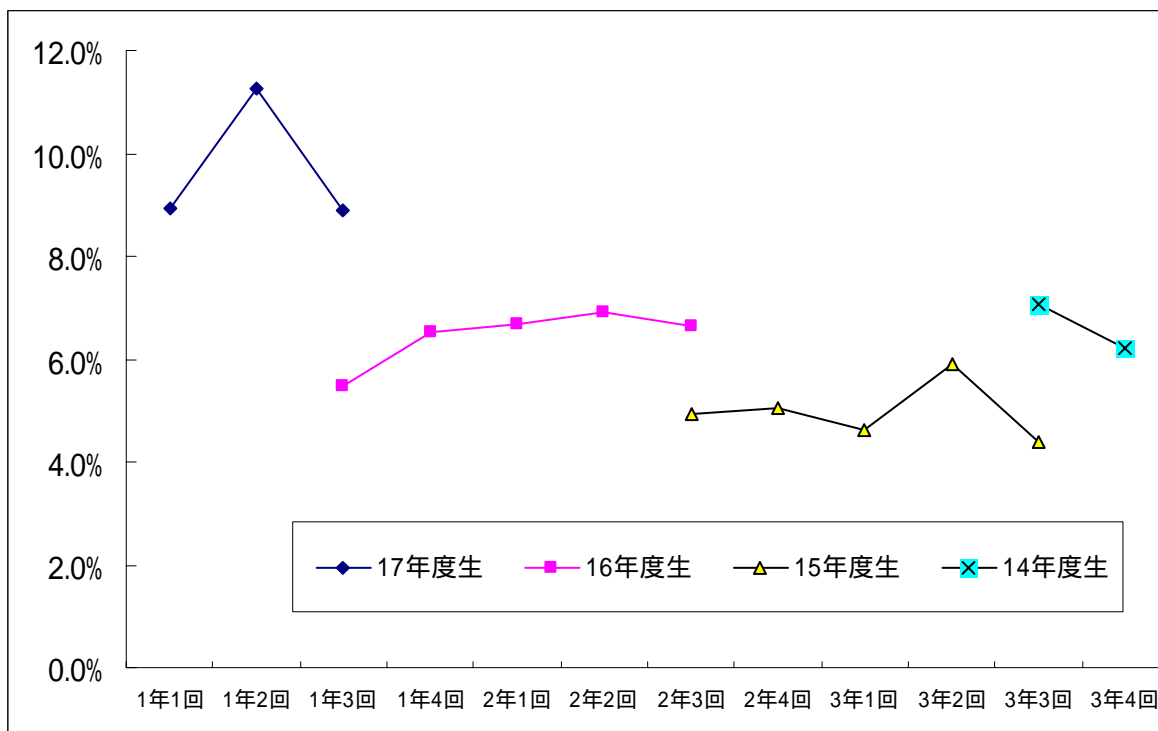
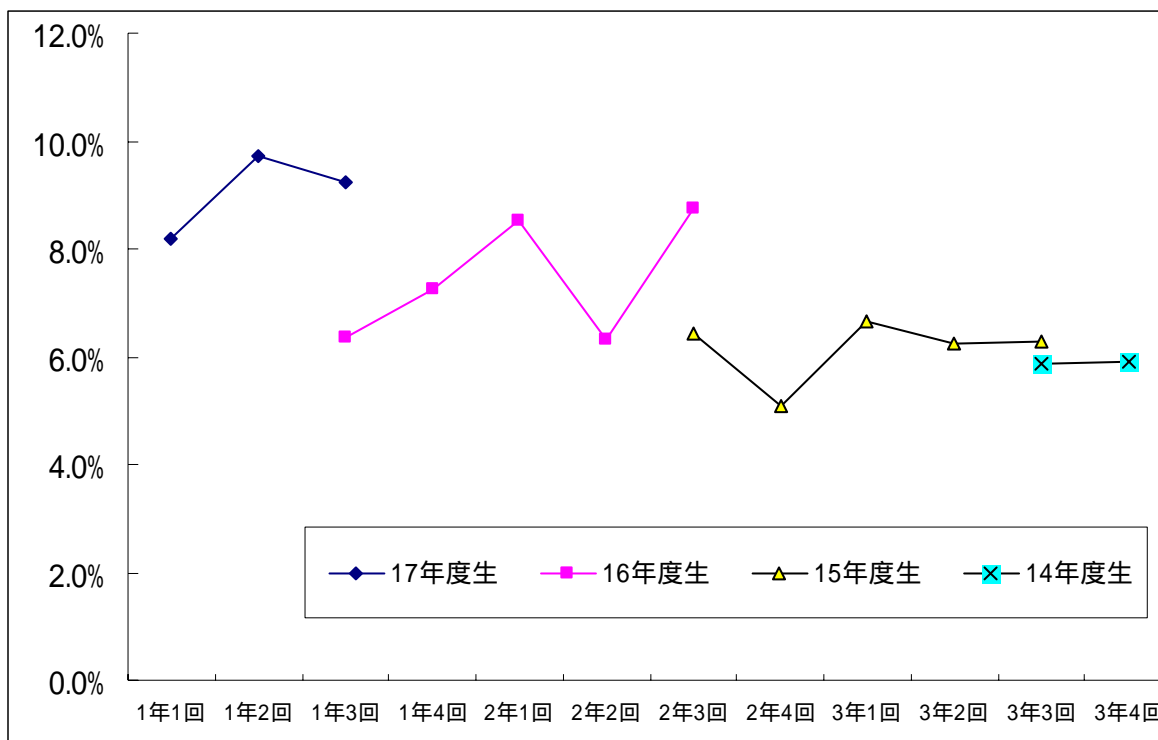


図6 - 1 - 3 - 1 「正確さ」における「パフォーマンスの変化」

スピーキングの「正確さ」



ライティングの「正確さ」



〔4〕議論するための「適切さ」の変化 【図6-1-4-2】

「適切さ」は、スピーキングとライティングとも同じ内容(テーマ)について記述するため、グラフを見る限り、2つのスキルがかなり似た形で上下に変動を示している。

入学年度ごとに伸長はしているが、学位年ごとに見ると、とくに右肩上がりになっているわけではない。

「どれほど深い内容を論じることができるか」は、その時期の指導内容に深く連動しているとも思われ、その指導内容のすべてが「英語の授業」であるとは限らない。問題意識や思考力を養うためのすべての活動がこれに相当する。

したがって、「適切さ」は少なくともある水準まで(本校では30点満点中20点でA判定)の到達を目指しつつも、生徒が身につけた知識や論理的な思考力を英語で表現する力を反映する一つの指標ではあるが、「言語」と「思考」の分離が不十分であることをふまえて、評価する必要がある。

しかしながら、この点について重要な示唆は、WSAテストでは、メリットを2つ、デメリットを2つ、自分の意見を1つという、合計5つの論拠を呈示することを求めており、これらすべてを呈示するためには、時間内にすべてを表現できるだけの「流暢さ」が必要である。

結局のところ、「適切さ」のパフォーマンスは、「言語」の流暢さと「思考」の流暢さの両方に依存していることも考えられ、流暢さを保証するための指標としてその意義を再確認する必要があると評価する。

そのためには、以下のような生徒の個人差について、考慮する次年度の取り組みが必要である。

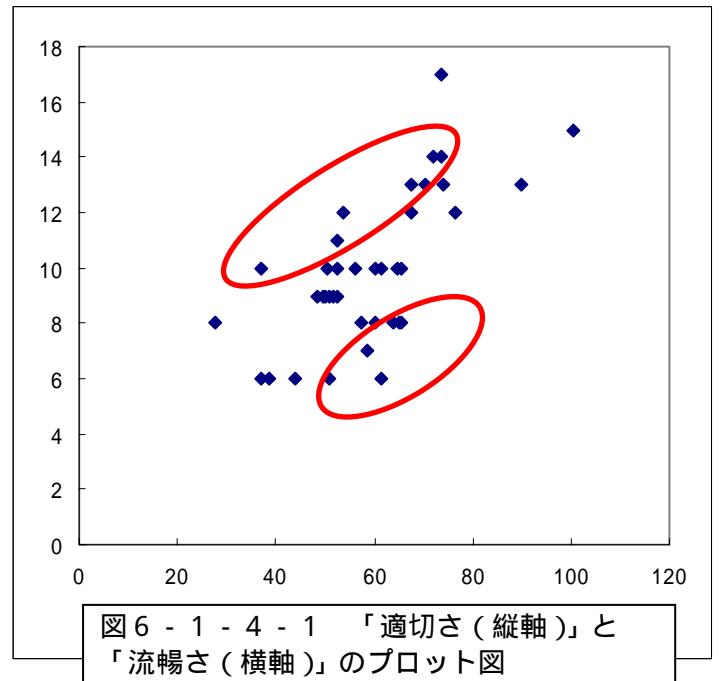


表6-1-4-1 「流暢さ」と「適切さ」の起源の構成図

		「流暢さ」	
		低い	高い
「適切さ」	低い	「言語」、「思考(意見)」とも劣る	「言語」のみ優れる(と言えるか?)
	高い	「思考(意見)」のみ優れる(と言えるか?)	「言語」、「思考(意見)」とも優れる

〔5〕議論するための「総合指数」の変化 【図6-1-4-3】

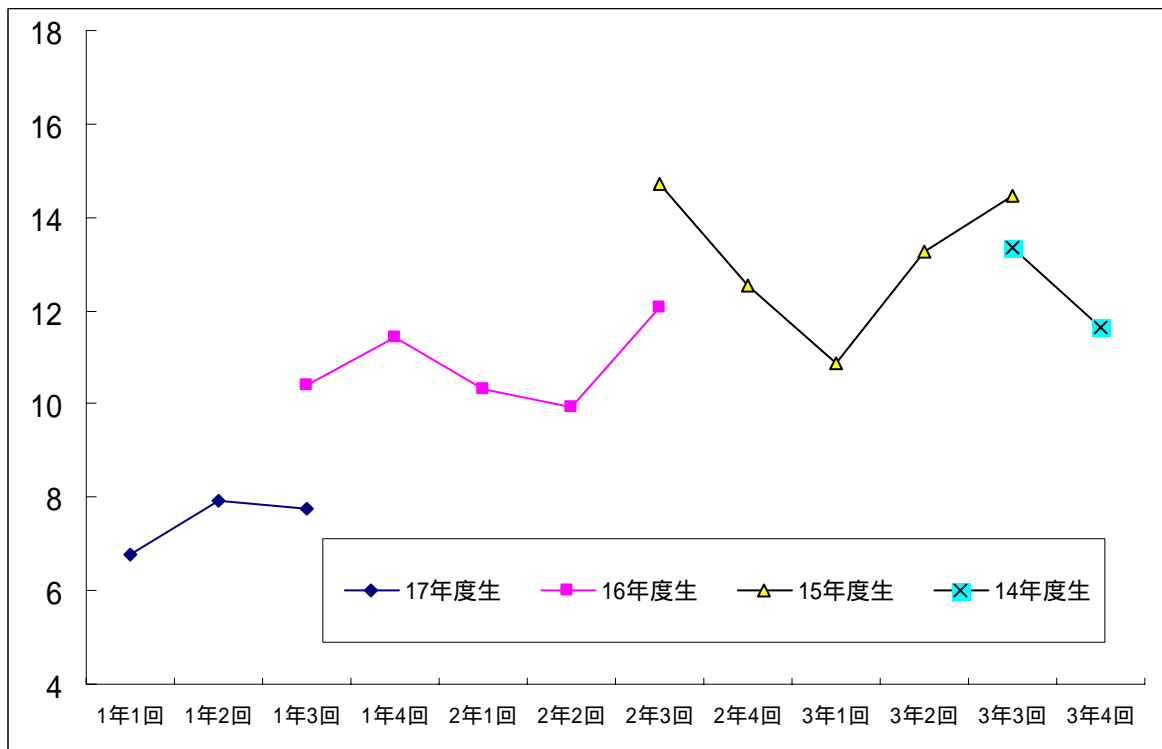
「総合指数」は、学年間、学年内ともに最終的な向上が示されており、この点において向上したと評価できる。

一方、「流暢さ」と「適切さ」あるいは「正確さ」との間に見られる、いわば「量」と「質」とのトレードオフの関係は、どの学年でもいったんは出現しており、「総合指数」を下げている。しかし、本年度は生徒の個人的な努力の結果、最終的な向上へと結びついたと評価する。

したがって、次年度はその個人的な努力によって補完された個人差の実態や、効率的な学習環境の提供など具体的な改善を行うべきと評価する。

図6 - 1 - 4 - 2 「適切さ」における「パフォーマンスの変化」

スピーキングの「適切さ」



ライティングの「適切さ」

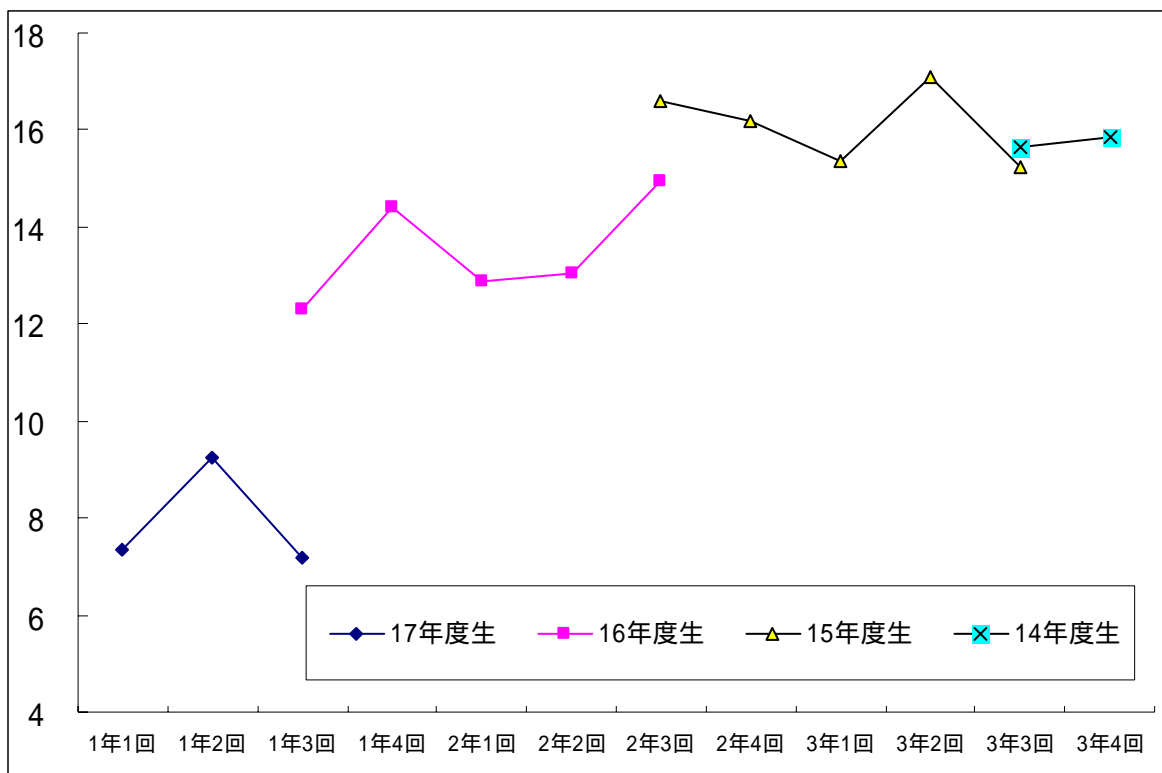
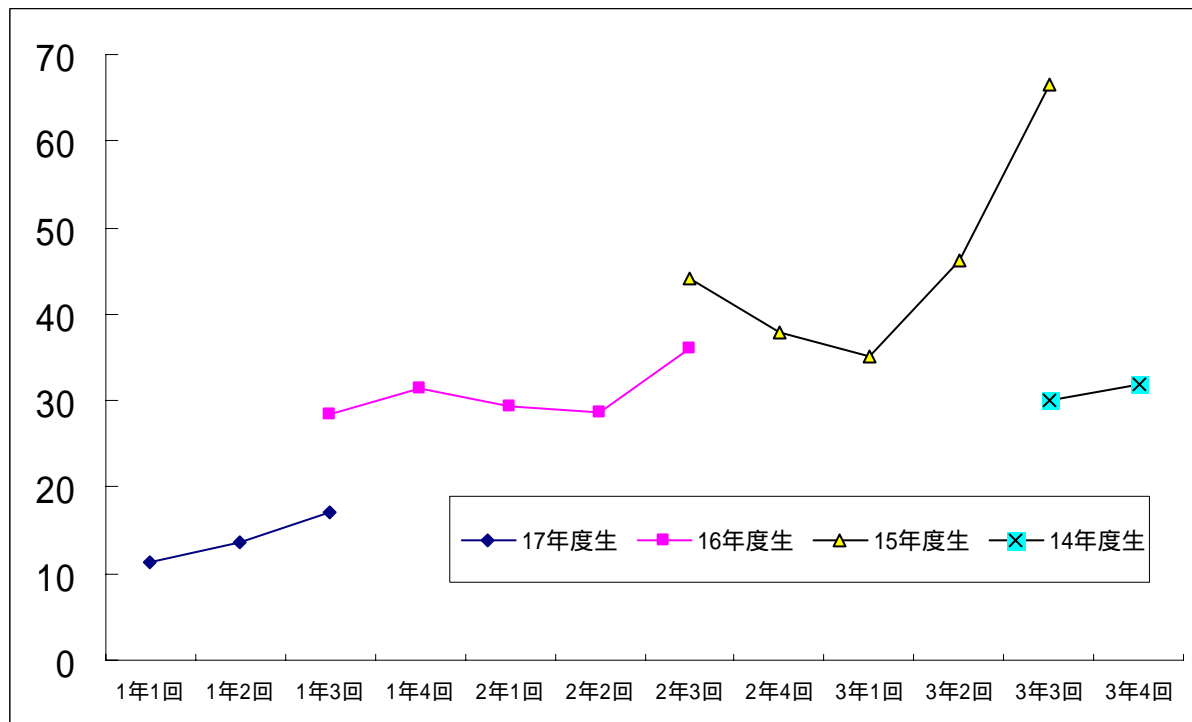
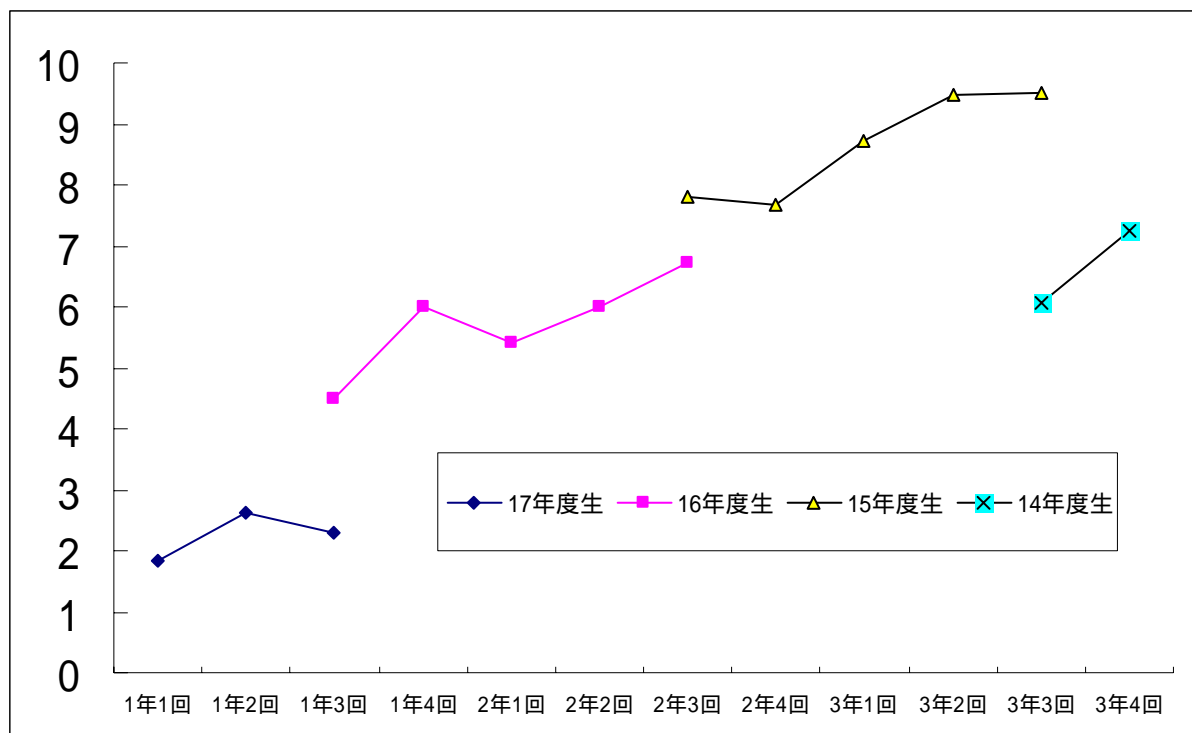


図6 - 1 - 4 - 3 「総合指数」における「パフォーマンスの変化」

スピーキングの「総合指数」



ライティングの「総合指数」



(2) その他の外部指標に基づく評価

〔1〕 実用英語技能検定のSELHi研究における位置づけとこれに基づく評価

実用英語技能検定は、「話す」を含む4技能のすべてを検査することで、総合的フィードバックとしての級の認定と、技能・設問ごとのフィードバックを得ることができる。

本校のSELHi研究開発では、「話す」・「書く」の発信型技能の開発に特化しているため、実用英語技能検定は、二次試験の面接によって「話す」の検査を含んでいるという点で本校のSELHi研究を評価する指標として利点がある。

本年度からは、SELHiをきっかけとした教育推進事業の一環として、本校の1年生と2年生の生徒は英検を『原則全員受検』することとした。

結果として、「国際コミュニケーションコース」では、従来からほぼ全員が「英検」を受検していたこともあり、昨年度に比して大きな変化はなかった。2級の取得者は昨年より4名増加した。一方、準1級では、昨年と同様に取得者は1名、準2級では、もともとこの級の受検を希望する生徒も少なく、昨年は8名下回った。

「普通科普通」を含む校内全体では、『原則全員受検』によって、2級と準2級において、昨年よりもさらに取得者が増加した。

しかしながら、合格率から考えて、現在のところやはり「2級は難関」である。このことについて、SELHi研究開発の推進と普及の観点から、今後さらに合格率、合格実績が上がるような指導・取り組みが求められる。その指導・取り組みのポイントは以下の2点である。

1次試験に関して、1年生や2年生の段階では、いわゆる「受験(大学入試)」を意識した学習経験に乏しいので、設問に対する適応力の点で十分ではなく、出題のタイプやレベルに対して慣れていないと、実力が発揮されない。2級(あるいは準1級)で出題される問題の設問形式と難易度レベルについて、過去問題などを通じて、日頃から授業で学習する内容との関連性を意識させ、受検に備えさせる。

2次試験に関して、「普通科普通」の生徒に対する『SELHiの普及』の観点から極めて重要な課題として、対策を立てる必要がある。現在のところ受検の直前期には「英検対策ビデオ2級・準2級(本校外国語科自主制作)」などで対応している。しかし、「普通科普通」の生徒に対する発信型の英語力の普及については、国際コミュニケーションコースとは異なるカリキュラムの中で身につけさせる方途を模索しなくてはならない。

表6-2-1-1 実用英語技能検定の取得状況 【国際コミュニケーションコース 122名在籍】

級	SELHi 指定以前	SELHi 指定後						
	平成15年度	平成16年度			平成17年度			増加率
	取得者計	受験者	合格者	取得者計	受験者	合格者	取得者計	
準1級	0	8	1	1	14	1	1	***
2級	23	51	35	58	63	24	62	270%
準2級	48	30	27	75	24	20	67	140%

表6-2-1-2 実用英語技能検定の取得状況 【校内全体 1119名在籍】

級	SELHi 指定以前	SELHi 指定後						
	平成15年度	平成16年度			平成17年度			増加率
	取得者計	受験者	合格者	取得者計	受験者	合格者	取得者計	
準1級	0	12	3	3	18	1	1	***
2級	41	115	62	103	417	60	121	295%
準2級	119	124	97	216	397	215	344	289%

表6 - 2 - 1 - 3 平成17年度 国際コミュニケーションコース在籍生徒の取得数率

	級	入学年度			
		H15年度 現3年生	H16年度 現2年生	H17年度 現1年生	合計
取得数	準1級	1	0	0	1
	2級	29	25	8	62
	準2級	20	27	20	67
取得率	準1級	2%	0%	0%	1%
	2級	71%	63%	20%	51%
	準2級	49%	68%	50%	55%
在籍数		41	40	40	121

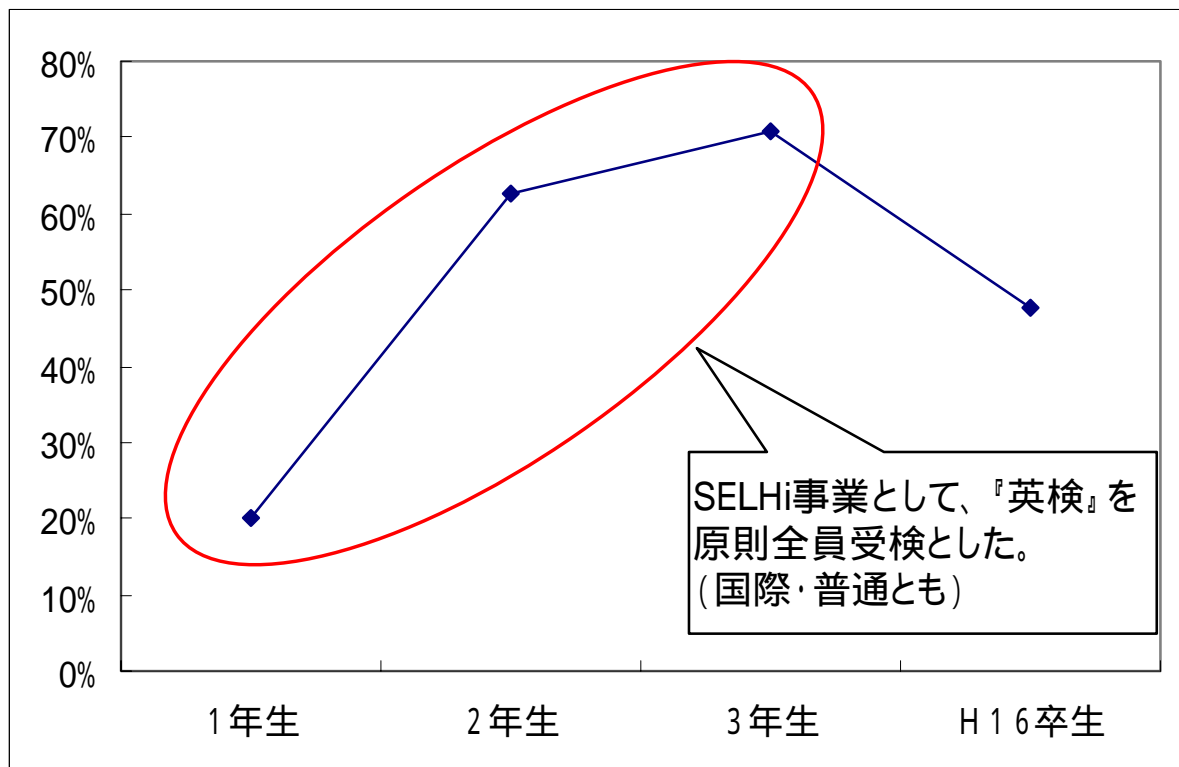


図6 - 2 - 1 - 1 . 「2級」の在籍中の取得状況 (国際コース 平成17年度まで)



〔 2 〕 GTEC for StudentsのSELHi研究における位置づけとこれに基づく評価

研究開発における位置づけ:英語のコミュニケーション能力を把握するための標準化された指標の一つとして利用した。実用英語技能検定(英検)が英語の4技能すべてを検査するのに対して、GTECではスピーキングを除く3技能が把握できる。また英検は 級という段階的な技量の表示に留まるが、GTECでは表4・5に示すような連続的なスコアと段階的な技量の表示が併用されている。加えて、実施の時期に制限がなく、いつでも必要に応じて実施できるという利点がある。

このGTECの結果は、本研究開発で独自に作成するWSAテストと組み合わせて利用することにより、WSAテストでは扱わないリーディングやリスニングの能力を含む、生徒の総合的な英語コミュニケーション能力の伸長の状況を把握することができる。さらに標準化されたテストに基づく数値データは、独自作成のテストの妥当性・信頼性を確認するため利用できる。

今年度は、7回(5月)、と8回(12月)の2度、希望者に対して実施した。テストは2タイプあり、1学年にはBasic、2学年、3学年にはAdvancedを選択した。両者はテスト間での連続性が図られており、習熟度が同じならば、どちらのタイプを受験しても同一スコアが出るよう調整されている。

表6 - 2 - 2 - 1 TOTALスコアと英語力のレベル (2005ベネッセ・コーポレーション)

グレード6 676 以上	アメリカ・カナダの大学に留学可能な英語力
グレード5 550 以上	社会で求められる英語力 / センター試験の英語で8割以上を点数できる英語力
グレード4 537 以上	アメリカ・カナダの短大クラスに留学可能な英語力
グレード3 440 以上	短期の留学で現地の高校の授業についていける英語力
グレード2 380 以上	ホームステイ・海外旅行で困らない英語力
グレード1 300 以上	ALTの先生と日常的な会話ができる英語力

表6 - 2 - 2 - 2 TOTALスコアに基づくグレード5および6の達成率(国際コース)

平成17年度 在籍生徒	受験数	グレード5 (550点)		グレード6 (676点)	
		達成数	達成率	達成数	達成率
1年生	39	19	49%	0	0%
2年生	33	23	70%	8	24%
3年生	40	38	95%	15	38%

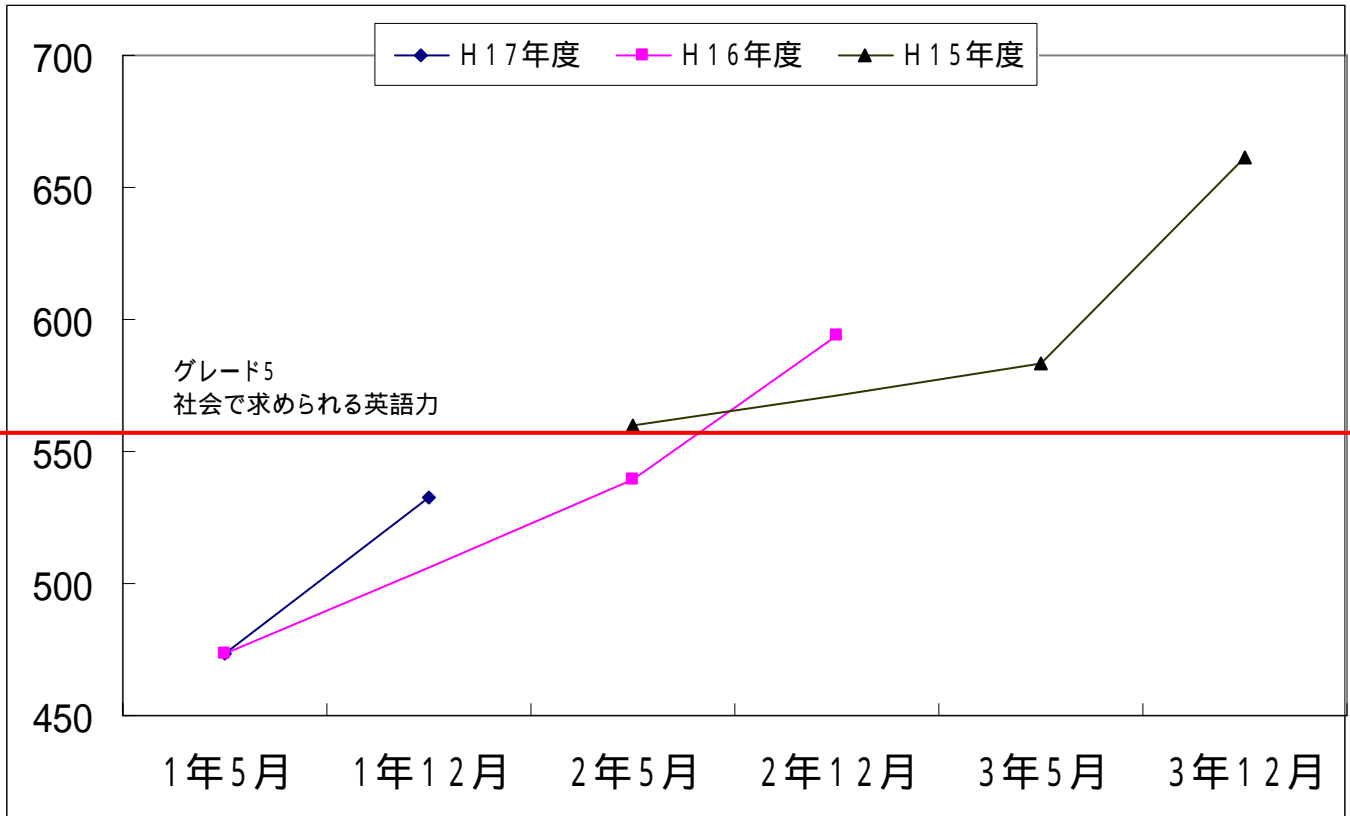


図6 - 2 - 2 - 1 . TOTALスコアの平均値の推移 (GTEC)

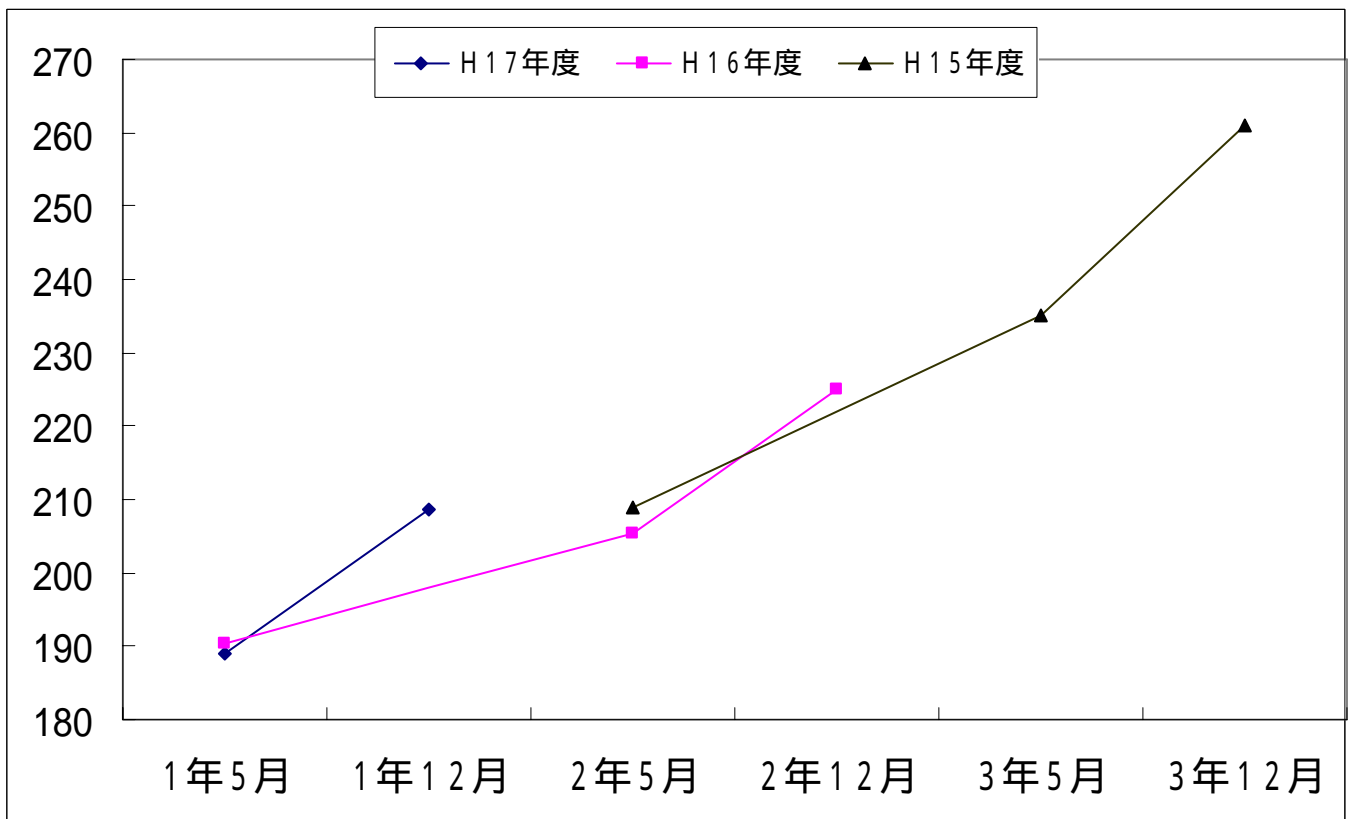


図6 - 2 - 2 - 2 . READINGスコアの平均値の推移 (GTEC)

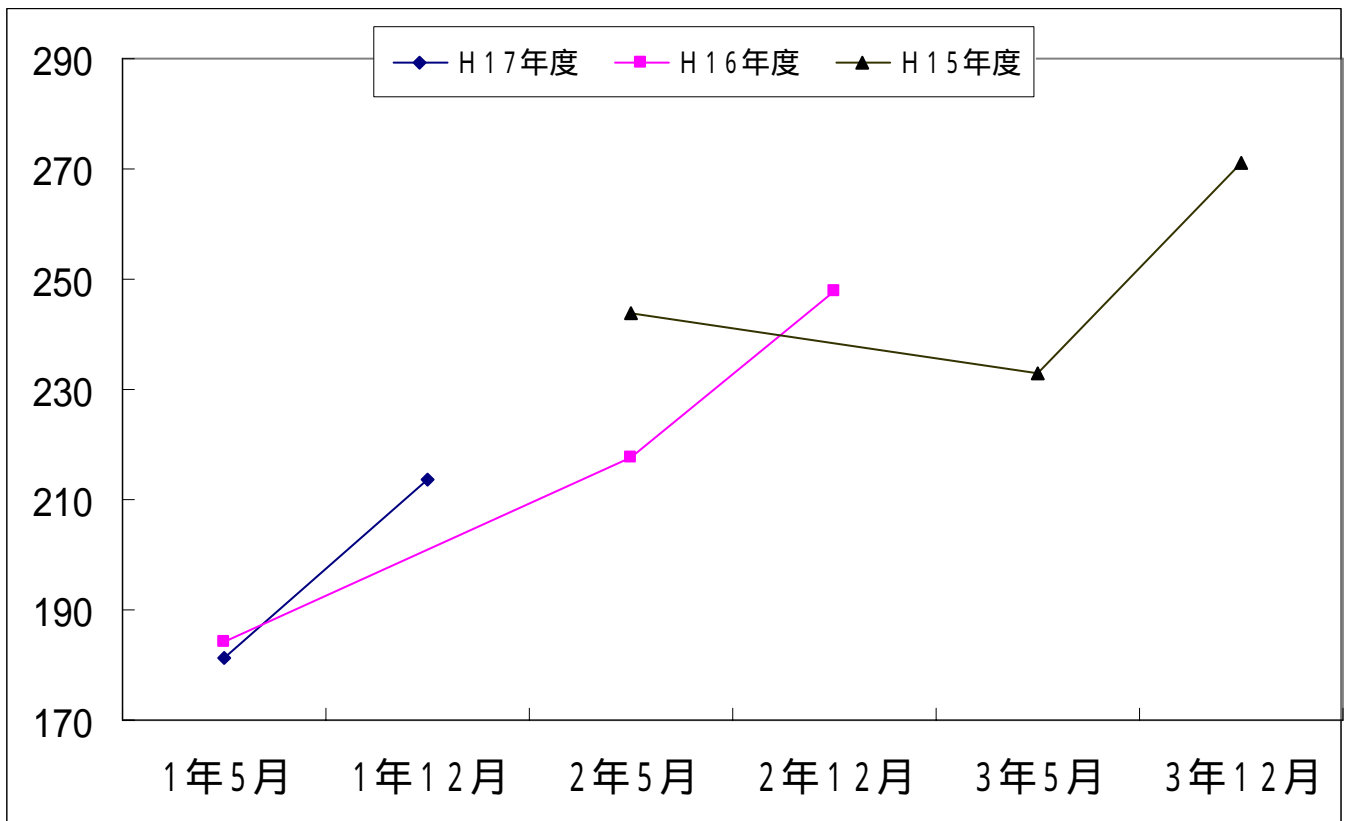


図6-2-2-3. LISTENINGスコアの平均値の推移 (GTEC)

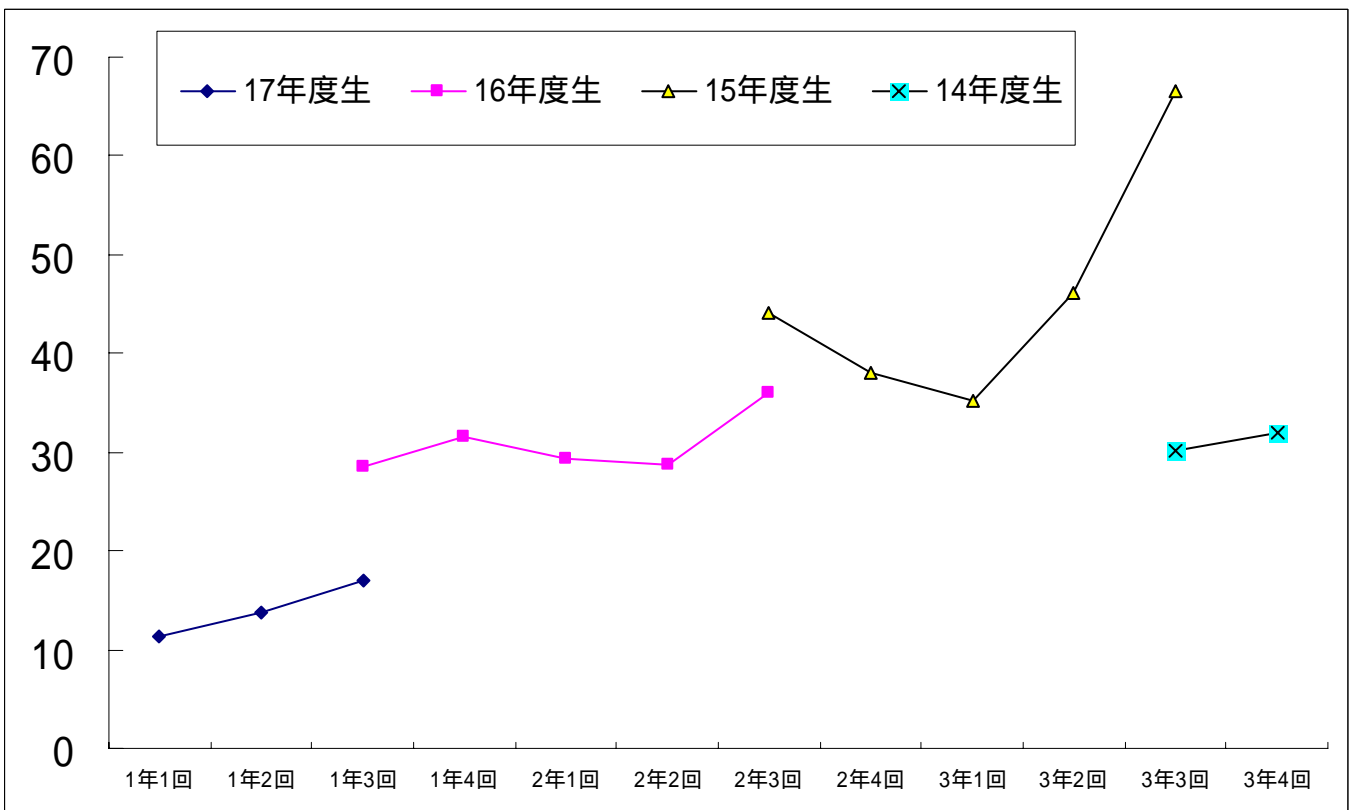


図6-2-2-4. SEPAKINGの「総合指数」の平均値の推移 (WSAテスト)

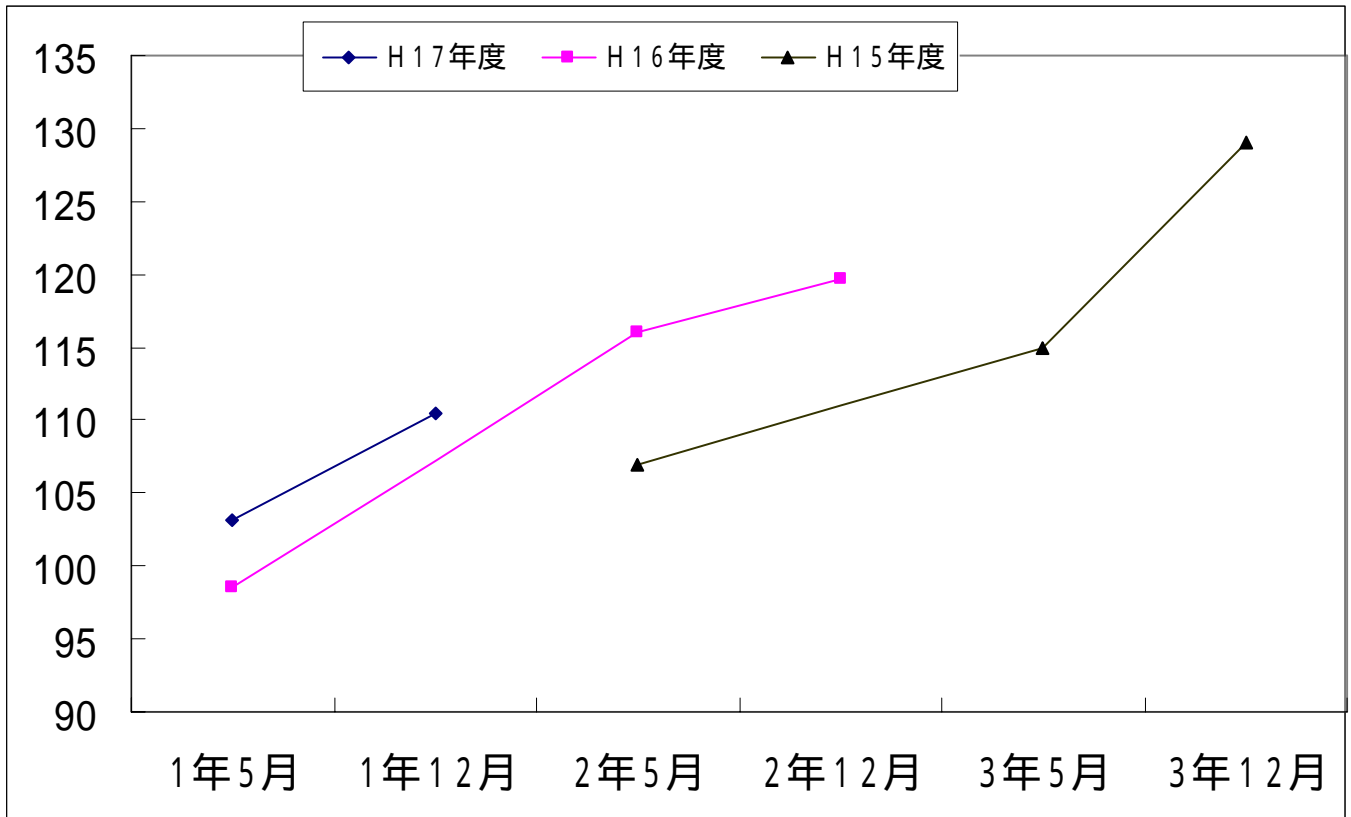


図6 - 2 - 2 - 5 . WRITINGスコアの平均値の推移 (GTEC)

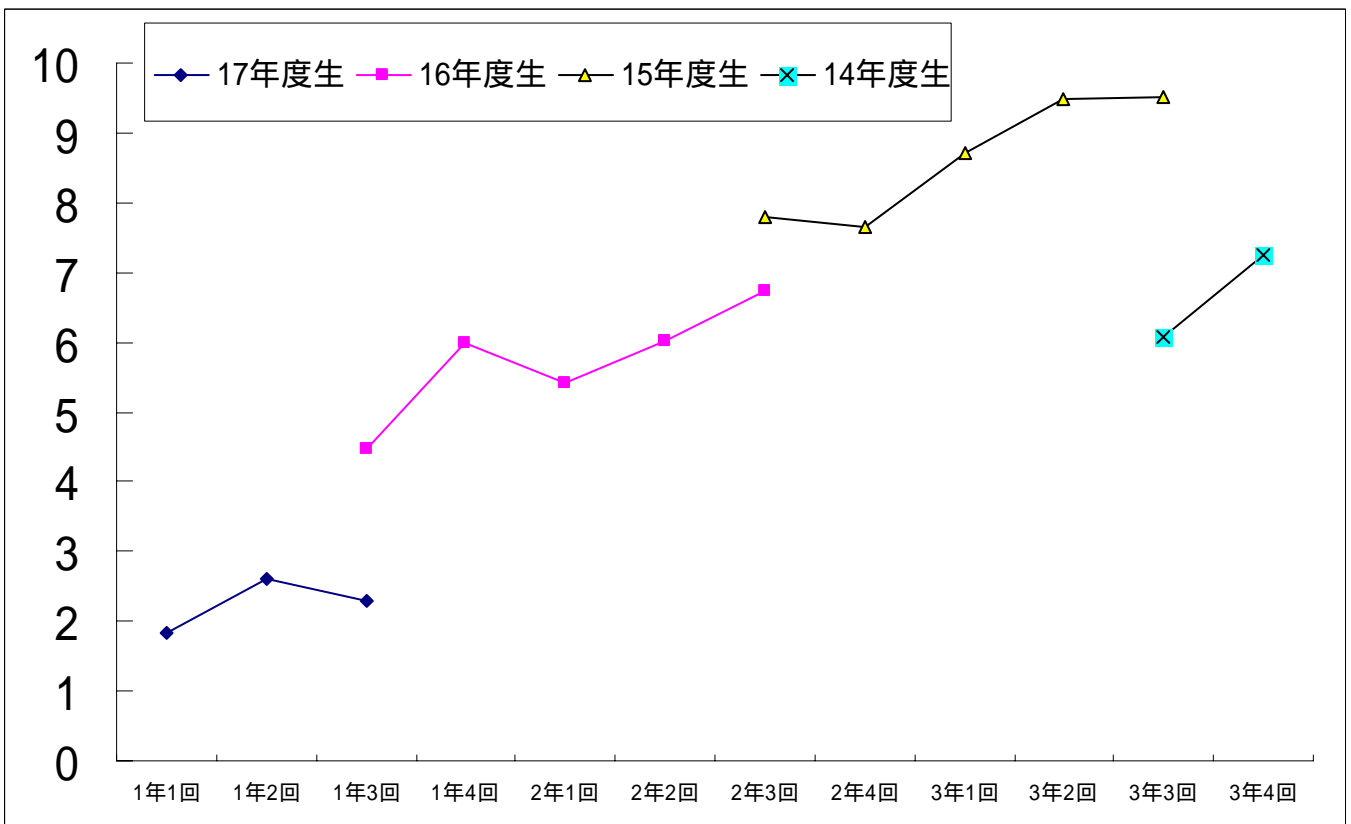


図6 - 2 - 2 - 6 . WRITINGの「総合指数」の平均値の推移 (WSAテスト)

表 6 - 2 - 2 - 3 Writing のグレード・スコアと習熟度の目安 (2005 ベネッセ・コーポレーション)

グレード6 160 以上	興味深い事例を取り入れながら、課題に沿った話の展開が完全にできている/文章の構成がしっかりしていて、文の段落が論理的につながっている/課題にふさわしい具体的な語句が、よく考えて選ばれている。
グレード5 130～160	事例を取り入れながら、課題に沿った話の展開ができている/接続語句を正しく使って、文章はまとまりよく構成されている/使われている語句は正確で多様性に富んでいる。
グレード4 100～130	課題に沿った話の展開が十分できている/接続語句をうまく使いながら、論理的に整理された文章がかけている / 難しい語句を使おうとする努力が認められる/ごくまれにミスによって考え方が伝わりにくいところがある。
グレード3 80～100	話の展開はやや不十分だが、具体的な事例を含めて、ほぼ課題に沿った内容が書けている/文の多くは論理的に整理され、構文や語彙にもいくらか多様性が見られる・時にはミスによって考えが伝わりにくいことがある
グレード2 40～80	語彙が少なく、文型・構文は単純なものであるが、英語で表現しようとする意思が認められる/最後まで書けていない文や語順が不確かな文があり、考えが伝わりにくいところがある。
グレード1 40 未満	文章が短く、ごく簡単な単語と文型で表現ができる/文の一つひとつが最後まで書けていないところがある/日本語を使って表現している部分がある。

〔3〕大学入試センター試験に基づく評価

広義の指標として、平成18年度大学入試センター試験での外国語(英語)の「筆記」と「リスニング」の結果を呈示する。全国偏差値を比較した図6-2-3-2に基づく、SELHiの対象である国際コミュニケーションコースは、「リスニング」において、普通科普通との差が大きく、音声重視の指導の成果が予期できる。

表6-2-3-1 平成18年度大学入試センター試験における外国語(英語)の結果

得点	筆記	リスニング	受験者数
国際コミュニケーションコース	174.9	47.4	38
普通科普通	144.6	39.6	318
全国の平均	127.5	36.2	499,630
全国の標準偏差	39.3	8.2	492,555

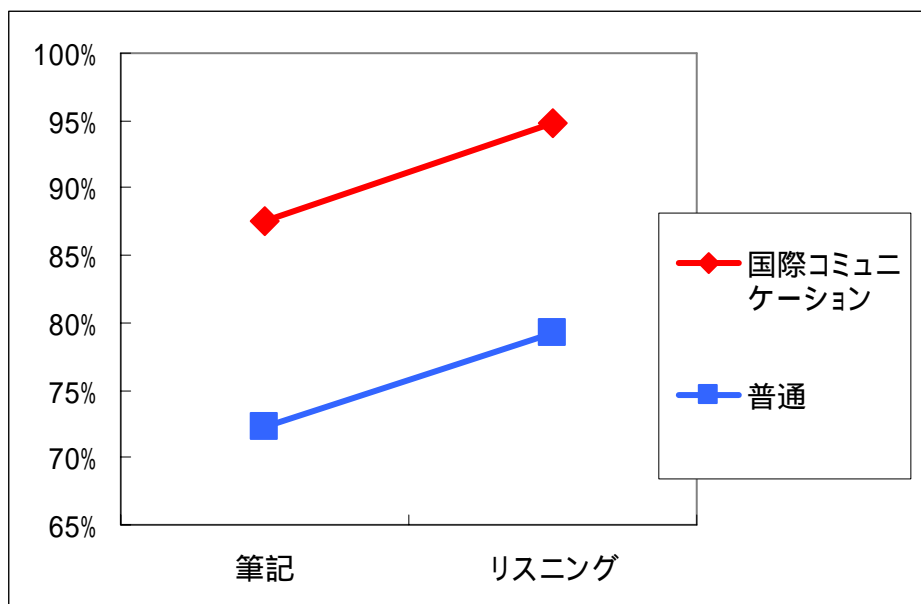


図6-2-3-1 「得点率」の平均値による2コースの比較

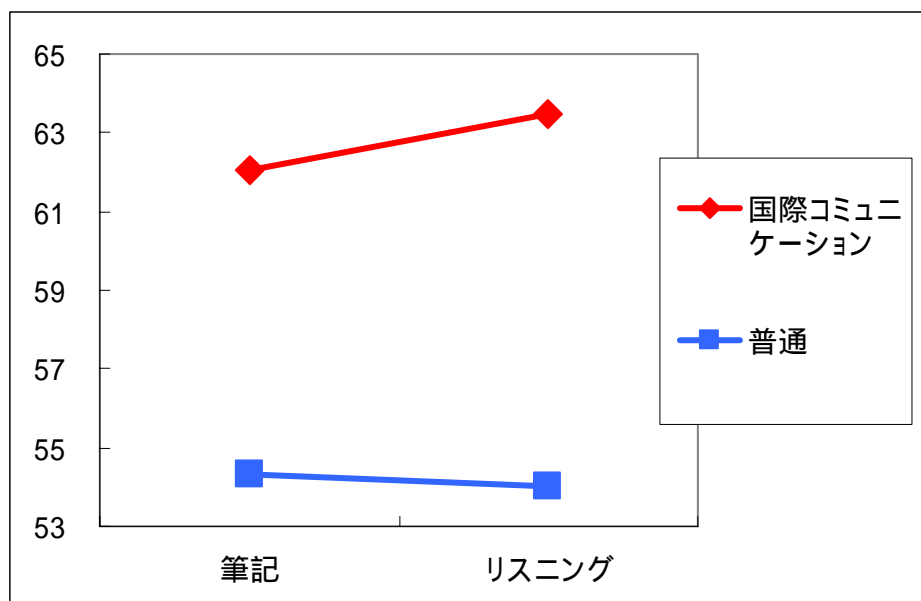


図6-2-3-2 「偏差値」の平均値による2コースの比較

## 7 校内の英語教育（特に授業）の改善状況

### （１）英語教員の指導方法の改善

#### 〔１〕教育課程やシラバスの改善

平成16年度(第1年次)の研究開発では、生徒の英語による発信能力の把握そのものが研究開発課題の一部であった。そこでSELHi指定と研究開発の成果に基づいて、次の2つの改善点が導かれた。

ライティングとスピーキングにおける明確な目標値の設定  
発信能力を高めるための「トレーニング型活動」のシラバス化

上記の改善により、各学年の指導の目標値に適合する指導内容・方法を考えることができるようになった。すなわち、これまでの質的な記述だけでなく、量的な目標の記述が加わることにより、教師・生徒ともに獲得すべき能力のレベルがイメージしやすくなった。結果として、上記のようなシラバスや定期考査の改善に繋がるとともに、生徒がスピーキングの流暢さなどでの自分の目標値を確認しながら、自主的にスピーキングのトレーニングを行い始めるなど、動機づけの面でも成果が期待できる状況である。

上記の改善により、新しいシラバスでは、これまで担当教師の裁量に過ぎなかったコミュニケーション・トレーニング型の活動を、科目間の体系化を図りながら位置づけることができた。これは、今年度までの授業及び授業シラバスが、時期を限定したイベント型の活動を中心に構成されていたため、知識や経験としての陶冶は可能であるが、本質的なコミュニケーション能力の向上には至っていないという反省に基づくものである。

平成16年度(第1年次)の授業においては、「音読」・「暗誦」・「即興」といったスピーキングの練習活動を探索的に投入した。

平成17年度(第2年次)には、これまでのライティング練習に加えて、スピーキングの練習活動を「年間を通して毎日練習する活動」として系統的に、S.U.P. Version 2(ステップアップ・プログラムの第2案)及び「科目ごとのシラバス」に位置づけて実施した。

平成17年度(第2年次)からは、S.U.P.を本格的に実施したことで、科目ごとの工夫や改善(ステップアップ・レポート)、普通コースへの随時適用(いわゆる小技)など、スタッフ全員で取りかかる体制がようやく整備されたといえる。

その成果の第一段階として、平成17年10月28日(金)には、「広島市立舟入高等学校SELHi研究開発成果中間報告会」を開催し、全国から80名の参加を得た。ここでは、外国語(英語)科の教諭全員が、国際コミュニケーションコース及び普通科普通を対象に研究授業を行い、ライティングとスピーキング及び「音読」・「暗誦」・「即興」のトレーニングによる「議論できる発信能力」を育成するための授業を展開した。

#### 〔２〕研究授業や公開授業の実施状況

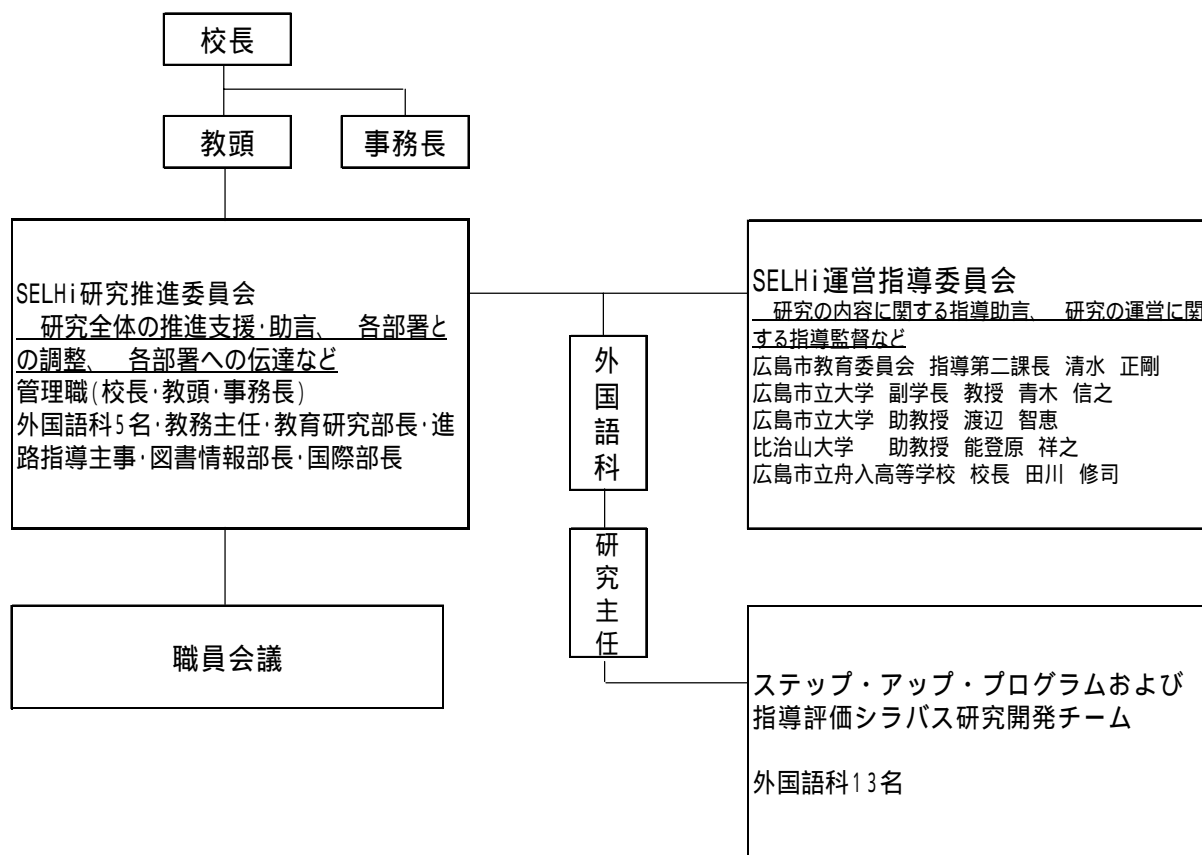
SELHi研究開発の成果の第一段階として、平成17年10月28日(金)には、「広島市立舟入高等学校SELHi研究開発成果中間報告会」を開催し、全国から80名の参加を得た。ここでは、外国語(英語)科の教諭全員が、国際コミュニケーションコース及び普通科普通を対象に研究授業を行い、ライティングとスピーキング及び「音読」・「暗誦」・「即興」のトレーニングによる「議論できる発信能力」を育成するための授業を展開した。

( 2 ) 校内組織の変容について

SELHi 指定を契機とする校内組織の変容はおもに、学校全体で SELHi の研究開発を支援するための「SELHi 研究推進委員会」と、実働として教科内での研究開発の進捗を図るための「SELHi 研究推進会議」の設立である。今年度は、「SELHi 研究推進会議」を昨年度の週1回、時間割の中に位置づけて行い、専門科目間の指導内容を体系化するために必要な調整を行った。このように、校内組織の変容を通じて、SELHi 指定に関わる研究開発を実施することにより得られた知見を教育活動の改善のためにフィードバックできる態勢を整えることができた。

8 研究開発組織

( 1 ) 研究組織図



( 2 ) SELHi 研究推進に関わる会議及び委員会

名称	頻度	場所	委員など
運営指導会議	隔月	広島市立大学	SELHi研究運営指導委員 (3) 外国語(英語)科 (3)
SELHi研究推進委員会	随時	校内	SELHi研究推進委員 (13)
SELHi研究推進会議	週2回	校内	外国語(英語)科 (13)



( 3 ) 運営指導会議活動状況

期日	場所	主な議題	協議・指導事項	協議・指導への対応
第1回 平成17年 6月10日	広島市立大学 国際学部	「第二年度の SELHi 研究開発 の推進と連携の あり方について」	第一年度研究開発実施 報告書の確認と助言 年次計画および研究成 果中間報告会の開催につ いて検討 個人学習ソフトの運用に ついて検討 今後の連携方法の検討	と については、前年度 の指導に基づいて行った、 第二年度の研究における 授業の変容の例などビデオ で確認した。
第2回 平成17年 10月28日	広島市立舟入 高等学校国際 コミュニケーション ホール	「SELHi 研究開 発を基礎とした 本校の教育課程 及び授業の変容 について」	『SELHi 研究開発成果中間報告会』の議事として別途掲載	
第3回 平成18年 3月16日	広島市立舟入 高等学校校長 室	「第二年度の研 究開発の概要と 次年度への課題 について」	「第二年度の研究開発」 の概要の確認 本年度の研究から導か れる問題点について 「第二年度研究開発実施 報告書」の内容について	は、「個人差」と「効率 化」の問題に加えて、「即 興性」を証明する尺度を改 めて呈示する必要が示唆 された。

(4) SELHi 研究開発成果中間報告会

〔1〕実施要項

日時 平成17年10月28日(金)  
 場所 広島市立舟入高等学校  
 日程

受付 9:30 ~ 10:00  
 開会行事 10:00 ~ 10:35  
 公開授業 10:45 ~ 11:35  
 公開授業 11:45 ~ 12:35  
 昼食 12:35 ~ 13:20  
 研究協議 13:20 ~ 14:50

ステップアップ・プログラムの概要と公開授業との関連について(説明:研究主任 西巖弘)  
 スタッフ全員による研究授業  
 (指導案は、【資料2-2~12】)

・本校のSELHiの概要について  
 (説明:研究主任 西巖弘)  
 ・研究授業についての質疑応答(司会:近藤あゆみ)  
 ・SELHiについての質疑応答  
 ・ご講評

広島市立大学 副学長 教授 青木信之先生  
 広島市立大学 助教授 渡辺智恵先生  
 比治山大学 助教授 能登原祥之先生

閉会行事 14:50 ~ 15:10

公開研究授業の概要

授業	学年	コース	科目	ステップ	概略	教室	担当
公開授業 10:45 ~ 11:35	1年	国際	英語	音読	英語を使用したコミュニケーション活動の基礎的な能力の育成をめざす科目。設定した目標値を既に超えているが、本時も音読のトレーニングに十分に行い、同時にパラグラフ・各英文の内容を正しく把握する。	北棟 3階 LL3	栗原 誠
	1年	国際	英語	音読	音読活動を通じ、英語を使用したコミュニケーション活動の基礎的な能力の育成をめざす科目。既に1分間で120語の音読という目標は越えており、更にその能力を伸ばしたい。英字新聞を題材にし、英問英答で要約し発表する能力を伸ばす。	北棟 3階 LL2	住田 恒三
	2年	国際	英語表現	即興	2年英語表現は、「読む(read)」、「考える(think)」、「表現する(express)」を授業展開の基本フォーマットとしており、18名の生徒を3グループに分け、本時は教師が進行役となり「人生における成功とは何か」をモチーフにディスカッションを展開する。	北棟 2階 国際 ホール	佐藤 将記 クレイク・ネリット ナタリー・ヤンチャムナム
	2年	国際	異文化理解	暗誦	CALL機器を活用することにより、英語の音声の特徴を習得し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する科目。1学期および2学期は、ダイアログの暗誦と発表活動を行なっている。本時はこれまでの授業形態のエッセンスを展開する。	北棟 3階 CALL	堂鼻 康晴
	3年	普通 文型	リーディング	音読	大学入試問題集の読解問題を題材に、さまざまな音読を取り入れ、楽しい雰囲気の中で英語を学べるように努めている。読解については、段落毎にまず主題を把握した後、詳細について理解し、最後に音読等により定着を図る流れで授業を進める。	東棟 2階 204号	栗栖 五代
	3年	普通 文型	リーディング	音読	英文を読んでその内容を理解する能力を伸ばすことを目標としている。2学期は音読等を通して、パラグラフごとのつながりを意識する授業を行っている。本時は、各パラグラフのトピックセンテンスを見つけ出し、全体の概要を把握する。	東棟 1階 106号	為西 正和
公開授業 11:45 ~ 12:35	1年	国際	オーラル・コミュニケーション	即興	間違いを恐れず積極的に英語で発信していく姿勢を育成していくことを目的とする科目。小グループに分かれ、その場で与えられた話題について1分半メモを取り(ブレンストリーミング)、その後1分半の即興スピーチを行う。	北棟 2階 国際 ホール	川本 由美 クレイク・ネリット ナタリー・ヤンチャムナム
	1年	国際	総合英語	暗誦	CALL教室の機器を用いて、英文の構造を理解し、習得していく活動を行っている。Recitation Practice、Pattern Practice、ペアワーク等を行ってインプットされた知識をアウトプットに結びつけることをねらいとする。	北棟 3階 CALL	大嶋 淳二
	2年	国際	英語	音読	教科書で学習した「英語の変種」を題材とし、「生徒は3~4名の各国代表団に扮して、自国の英語について発言する」という趣旨のもとで行われる「ブチ国際会議」。音読をベースとし、暗誦、即興へと発展させる。	東棟3階 303号 304号	佐々木 百合子 佐藤 将記
	2年	普通	英語	音読	1学期に行ったペア和訳から、2学期は速読力伸長を目指したサイト・トランスレーションを中心に授業を行う。英問英答や音読で理解を深めた後、マッピングからブチ英作文を取り入れ、楽しい雰囲気の中でコミュニケーション活動の基礎的な能力の育成をめざす。	東棟4階 404号	近藤 あゆみ
	3年	国際	コミュニケーション	即興	英語で即興的に意思疎通するためのトレーニングを中心とする科目。2学期は「トーキングマッチ」と「ディベート」を行っている。本時は、普段のトレーニングに加えて、トーキングマッチの団体戦を行う。	東棟 2階 201号	西 巖弘 横山 直子

〔 2 〕 研究授業に関する質疑応答

学年	コース	科目名	担当	質疑	応答
1	国際	英語	住田 恒三	普通の教科書を使った授業での展開はどうなっているのか	英語の運用能力を伸ばすことは大事な課題ですが、いくら話せるようになっても、話す内容がなければ議論は成立しません。授業を通じて生徒に考えさせる機会を与えなければならぬと考え、英字新聞を時折活用している。過去の生徒にも同様に与えてきているし、一昨年度のある国立大学で入試問題にそのまま使用されたケースも2回あった。そのようなタイムリーな話題は教科書では無理である。教科書を用いた授業では、音読を中心に英問英答で内容把握させている。(住田 恒三)
1	国際	英語	栗原 誠	音読を実施して生徒がどのように変わったか。	国際コミュニケーションコースの生徒なので、英語が得意教科である生徒が大半であるが、音読に関しては、音読に時間をかけてきた生徒と、そうでない生徒の生徒にかなり差が見られた。毎時間、音読の時間を確保することで、発声に関する抵抗感は早い段階でなくなった。英文を見ながらの、リピティング・シャドーイングと英文を見ないでのリピティング・シャドーイングを行い、暗誦へと発展させている。現在、音読に関してはすべての生徒が意欲的に集中して取り組んでおり、1分間に読む語数の数値目標もクリアしている。自己表現力養成の土台となるトレーニングを1年次で十分に実施しておきたい。(栗原 誠)
2	普通	英語	近藤 あゆみ	授業の導入で実施されるテストは他にどのようなものを行っていますか。	ウォームアップとして当日に行ったインフォメーション・ギャップゲーム(IG テスト)以外に、ペアが1分間話した内容をできるだけ正確に繰り返す reproduction や、歌に合わせて動詞の不規則変化を暗誦するなど、様々な活動を3分程度で行っている。(近藤 あゆみ)
				「日英ペアテスト」はどのようなものか教えてください。	先生役が指定箇所(キーセンテンス)の日本語をいうと、ペアの相手はその文を英訳して答える。正確に英訳できると1ポイントとなり、その合計点をノートに転記するという、生徒同士のペアテストである。(近藤 あゆみ)
				日英の対訳プリントは最初に配布されるのでしょうか。	生徒は自分のノートに予習として和訳をしていくことになっているので、生徒の予習を確認し、QA で全体の内容理解を確認した後、プリントを配布して速読に訓練に用いている。(近藤 あゆみ)
				この授業にあった素晴らしいテスト問題というのは、どんなものなのでしょう。	定期テストに、どのように音読などの活動効果を反映させていくかは今後の課題であると捉えている。(近藤 あゆみ)
				サイト・トランスレーションでプリントが配布されていましたが、生徒は日本語訳等をノートに準備してくるようになっていきますか。それとも訳先渡しで活動に重点を置かれているのですか。	予習として生徒は和訳をノートにして授業に臨むが、授業中に日本語訳の確認はせず、レッスン毎のノート提出によって個別に日本語訳の確認を行う。授業中は、ペアや教員と「読む・聞く・書く」活動と、音読が中心となる。(近藤 あゆみ)
				このような授業を通して、生徒はどのように変わりましたか。今回の授業では見えない成長ぶりについて教えてください。	授業中の生徒の表情はかなり変わったと感じている。また、ペアに迷惑がかからないように予習をする割合や授業に取り組む姿勢の向上に役立っているように思う。(近藤 あゆみ)
2	国際	英語	佐々木百合子	『シャワーを浴びるがごとく英語に触れる』の具体的な方法は？	・音読に次ぐ音読 ・シャドーイング ・暗誦 ・中抜きプリント ・英英辞書を使っての単語テスト ・ディクテーション(テキスト、歌、スピーチ、ニュース、etc.) (佐々木百合子)

2	国際	英語表現	佐藤 将記	How Do You Spell Success? の授業について 価値観を求める授業の中で、優越をどうつけていくのか。つまり評価はどのようにしていくのか。このようなテーマで授業を展開させる際、どのように動機付けしているのか。	・ディスカッション自体を個人評価はしない。ディスカッションのトピックをエッセイのトピックとしてライティングに還元させるようにしている。・ディスカッションの前にトピックに関わる読み物とディスカッションシートを課題として与え、事前に調べたり、考えたりした上でディスカッションに臨むことができるようにしている。今は生徒に身近なものを題材として選ぶよう心がけている。(佐藤 将記)
				授業は生徒19名、教師3名で展開されているが、その割合と普通科生徒の反応、学習意欲の差異はどのようなものか？	普通科普通の生徒の中に不公平感を感じている様子はない。英語に対する学習意欲についても、国際コミュニケーションコースと普通科普通の生徒間に大きな差異は見受けられない。(佐藤 将記)
2	国際	異文化理解	堂鼻 康晴	学習の初期段階において、英語の質問が理解できない生徒や答えたいが何と書いていいかわからず沈黙する生徒はいなかったか。いた場合はどのように対処したか。授業中、内向的な生徒の気持ちを外に向けて"open mind"状態にする取り組みやコツはあるか。	本授業の生徒は比較的外向的であり、特に"open-minded"な状態にする取り組みは行っていないが、敢えて言うなら、質問の難易度を変化させ、個の英語力に応じた質問をする、教師自らができるだけ"open-minded"になる、生徒の成果をできるだけほめる、同様の活動を繰り返すことによりタスクに対する情意フィルターを下げる、ことであろうか。(堂鼻 康晴)
				観察評価・形成評価の方法は。	観察評価については、「タスクに積極的に参加しているか」を目視し、その都度マイクを通して各生徒にフィードバックしている。形成評価については、「質問に対する回答の正誤」で評価し、口答でフィードバックしている。(堂鼻 康晴)
3	国際	コミュニケーション	西 巖弘 横山 直子	モノログシートをどう評価するか。ディベートをどう評価するか。	どちらも非常に難しい問題と認識している。コミュニケーション系の授業では、生徒の「発話」を評価する必要がある。しかしながら「発話」のチャンスは、すべての生徒に平等ではなくディスカッションの流れや時間的な制約に左右される。この理由から、モノログやディベートについて授業中の活動状況で生徒のコミュニケーション能力の評価はできない。従って、各生徒が積極的に参加しているという「態度」を評価した上で、モノログシートにより流暢さの伸びを確認し、またディベートではジャッジシートとライティングの課題により論理的な理解力・表現力を確認している。(西 巖弘)
				即興ディベートであるところまでできるようになる指導のコツを教えてください。	1,2年からの積み重ねである。あるテーマについて「自分はどう思うのか」を絶えず自問すること、とにかく黙っているのではなく、まずは英語を話すことの2点を徹底して指導してきた。具体的には、例えば、誰かがスピーチ発表をした場合、必ず、質問をしたり、感想を述べることを求めてきたし、教師が率先して誤りを恐れず、授業中英語を話し、生徒にもそれを求めてきた。(横山直子)
				生徒は自主的にネットとかでネタを仕入れるのですか。それとも授業中にそういうリサーチの時間をとっているのですか。	授業時間を割くこともあるが、主には、生徒が自宅インターネット等を用いて調べたり、放課後、学校のコンピュータを使用して、リサーチをおこなっている。(横山 直子)
				教科書に沿ってやられているのでしょうか。	高校生のコミュニケーション活動に適したテキストは非常に少ないのが現状である。テキストの中から本校の生徒に適したものを選んで扱ったり、自主プリントを作成したりしながら授業を行っている。また、「コミュニケーション」の授業は、生徒が自分たちでリサーチして発表する活動が多いため、教科書で教えるという場面は必然的に少ない。(横山 直子)
3	普通	リーディング	為西 正和	生徒には、どの程度までの予習を課してい	読解については課していない。授業の時間内に内容を把握できるよう努めている。文法編については予習させてい

				るのですか。	る。(為西 正和)
その他				英語で授業するか、日本語で授業するかについて何か全体のStandardがありますか。	ルールとして取り決められているものはない。基本的には「授業のねらい」、すなわち各科目の目的やシラバス上の位置づけに応じて、「英語で行うべきか、日本語で行うべきか」を授業担当が判断している。実態として、「即興」のステップをねらった科目(OC、英語表現、コミュニケーション)は、100%英語で、その他は適宜「ねらい」を見定めて、英語と日本語を使い分けている。(西 巖弘)
				速読の力(wpm)を正確に計るのに苦労しています。その理由は、教材の難易度の均一化が難しい 生徒が予習をしているかどうかで変わってしまう 生徒が読めると思っても実は内容が把握できていない 何か工夫がありますでしょうか。	本校の「ステップアップ・プログラム」における「音読」と関係する。トレーニング型として「音読」の速さ(wpm)を能力指標の一つとしている。ここでは、質疑のように難易度の均一化を目指すことよりも、難易度の異なる教材を与えることで、生徒が多様な負荷を経験し、この経験を通して何を学ぶか、何を身につけるかという点を重視している。質疑、の点についても、診断の目的、つまり速読力を計った結果をどう生かすのかによって適切な方法が異なる。については、「音読」においても初見か、内容把握を行った後か、あるいはその中間を重視するかという議論を行っているところである。についても内容把握をしながらの「音読」について検討する余地がある。 直接の回答にはならないが、現在の研究成果から考えられる点は以上である。(西 巖弘)

〔 3 〕 研究開発およびその他に関する質疑応答

研究内容	質疑	応答
(1) (2)	ステップアップ・プログラムの概念図を詳しく説明してください。それぞれの内容も含めて。	英語による発信能力を強化するためのシラバス(授業内容)の前提となるものである。英語の4技能のうち、「英語で議論できる力」の育成に向けて、授業内の活動を「イベント型」と「トレーニング型」に分類し、「外国語科」及び「英語科」の科目に系統的に分類している。 系統性のカギとなるのが、到達の「目標値」と「負荷」の調節である。意図した「目標値」に対して適切な言語と思考の「負荷」を経験させながらステップアップさせていくという考え方である。さらに詳しくは、1年次の研究開発報告書を参考にしてください。(西 巖弘)
(3)	WSAテストについて詳しく教えてください。	開発目標の「英語で議論できる力」の到達度を測定するテスト。「議論できる力」は、「身近だが賛否両論のあるテーマ」について「書く力」と「話す力」と定義した。 現場の実情にあわせて、「採点の客観性と利便性」及び「生徒への教育的フィードバック」について配慮して、「流暢さ」・「正確さ」・「内容の適切さ」の3指標を「ライティング」と「スピーキング」別に考慮し、JTEとAETが共同で採点を行う。 現在これを4回実施しており、指導を通じて「流暢さ」は向上しているが、「正確さ」と「内容の適切さ」は、必ずしもそうではなく、傾向として「量と質とのトレードオフ」の関係が見られるようである。(西 巖弘)
その他	SELHiの最終報告書、及び最終報告会はいつ、どのような形で行われますか。大体の予定を教えてくださいと思います。	本年度と類似する時期及び形式で行う予定である。今年度の研究報告書とともに送付する予定なので是非参加してください。(西 巖弘)
	国際コミュニケーションコースの生徒の中で、いわゆる帰国子女は何名ですか。その割合と併せて教えてください。	3年生41名については、小学校時代にドイツ、ペルー、タイなどにいた生徒は5名いるが、小中学校時代に英語圏に長期滞在した生徒はいない。他に中国籍、ブラジル籍の生徒が各1名ずついる。(横山 直子)
	国際コミュニケーションコースの生徒の中で、第2外国語に関して、韓国語・フランス語にゆかりのある生徒はいますか。いればその割合を教えてください。	3年生については、該当する生徒はいない。(横山 直子)

	<p>CALL 機器の活用について  まだ導入していない学校が導入する場合、具体的ソフトや教職員の研修などどのようにしたらよいか。御校の例を具体的に教えていただきたい。</p>	<p>現在、本校で活用している主なソフトは「ELTAS Pro」と「Pronunciation Power」の2つである。「ELTAS Pro」はQuick Response, Word Reordering, Word Learning, Speed Reader, など、様々な内容のものが入っており、語彙力・文法力・読解力をつける上で大変効果的なソフトである。また、「Pronunciation Power」は英語の正確な発音を身につけたり、リスニング力を向上することにおいて最適のソフトである。</p> <p>研修については、機器の操作については設置した業者にお願した。また、授業での効果的な使用法については「CALL 研究会」に参加したり、CALL を設置している大学を訪問し、授業見学や担当の教員との情報交換を行った。  (大鴻 淳二)</p>
	<p>カナダの海外研修の内容・費用は具体的にどのようなものか。</p>	<p>英語の実践的な運用力の向上を図る宿泊研修については1年次夏季休暇中(国内)、1年次春季休暇中(カナダ)、2年次修学旅行(オーストラリア等)の計3回実施している。</p> <p>研修の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・期間(2週間)中、生徒一人が一家庭でホームステイする日数を最大限確保し、英語を使用する環境を設定する。</li> <li>・現地高等学校において授業見学、授業参加をするとともに、交流会等で、日本文化を紹介する。</li> <li>・現地語学研修専門学校が実施する研修に参加する。</li> <li>・先住民の異文化について事前学習を行い、研修に参加する。</li> </ul> <p>研修の費用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約30万円。学校行事である修学旅行とは異なり、原則的には希望者参加の研修であるため、費用の徴収は毎月の積み立てではなく一括払込である。その旨は入学時に保護者に説明している。(栗原 誠)</li> </ul>

〔 3 〕 SELHi 運営指導委員からの指導・助言

委員名	所属	指導・助言	対応・対策
青木 信之	広島市立大学 国際学部 副学長 教授	<p>【システムチックに展開】 授業が、ステップアップ・プログラムに基づいてシステムチックに展開されており、研究開発の2年目の中間報告の段階として、ある一定の成果と今後の方向性が見いだされた状況である。 高校生が身につける英語としては評価に値するが、今後これ以上の成果を上げるためには、以下の2点を考慮することが必要。</p>	<p>初年度の授業内容と生徒の達成度が不十分であった点について、可能な限り科学的な評価を行い、その結果と反省点に基づいて、ステップアップ・プログラムの再編成を行った。 現在は、各授業担当者が「イベント」と「トレーニング」の指導に関して工夫と改善を行っている段階である。学習のねらいと活動内容が少しずつ異なるそれぞれの科目での実践を年度末に総合的に評価・考察し、その反省に基づいてシラバスをさらに改良し、次年度の指導に使用する。(西 巖弘)</p>
		<p>【環境を最大限に生かす】 授業内、あるいは学校における教育活動の主要な範囲で行い得る指導の強化には、すでに時間的・労力的に限界がきていると考えられる。従って、これ以外の部分で効率的・効果的に学習をさせるような環境作りが求められる。 例えば、生徒の学習資源として、 先生 友人・パートナー 自分一人 コンピュータ といったコミュニケーションの対象を上手に利用させるよう科目間で相互補完的に位置づけることなどが考えられる。</p>	<p>各科目の授業がシラバス上で、「授業時間外での学習のしかた」をさらに詳しく記述すれば、生徒が自発的・自律的に学習できる部分を増やすことができるということも考えられる。この点で左記の ~ の学習資源についての提案は非常に示唆的である。 とくに、については、生徒の自発的・自律的な学習に対してこちらから与えることのできる貴重な環境であり、青木先生、渡辺先生による『ぎゅっとe』は、この点に関してとくに有効である。 さらに、「授業内」に行うべき学習活動と「授業外」でも可能な学習活動を吟味して振り分けることで、生徒の学習活動全体を有効に利用することを目指した指導シラバスも作成可能と考える。(西 巖弘)</p>
		<p>【個人差に焦点をあてる】 舟入高校の SELHi の取り組みでは、独自開発のテストやアンケートなどで多くのデータが収集されている。今後この点を生かすなら、fluency / accuracy / quality などの各指標に基づいて生徒の個人差を拾い上げ、どう対処していくかということに着手して、生徒の能力を高めていくという方向性も考えられる。</p>	<p>発信能力に特化すれば、fluency / accuracy / quality といった外在するパフォーマンスの類型化と併せて、初年度の研究で課題として残されている「言語」あるいは「意見」の不足といった、学習者に内在する発信能力の前提条件についても考慮する必要があると考える。 また同時に「周辺的能力」として各学習者に固有の学習スタイル・ストラテジーを類型化して把握することを通して、学校内の教育活動に限定されない、より望ましい学習行動を形成して、英語の能力を全体的に高める。(西 巖弘)</p>



<p>渡辺 智恵</p>	<p>広島市立大学 国際学部 助教授</p>	<p>【WSA テストのデータを有効活用する】 舟入高校の授業については科目間 がそのねらいと活動内容の点で有機 的に結合しているという印象を持っ た。 また、WSA テストは、単に「書く」、「話 す」の能力を測るというのではなく、流 暢さ、正確さ、適切さといった指標によ って能力が細かく評価されるとともに、 生徒にとってもこの評価に従って自分 の目標を設定することができるという 利点がある。 今一度、このテストのデータを大切に 分析して、生徒の能力伸長に有効利 用できる方途を探るとよい。</p>	<p>初年度の研究内容として、「書く」・ 「話す」の技能の能力評価指標の設 定を慎重に行った。結果として、各技 能を総合力として捉えるだけでなく、3 つの構成要素を別々に把握して、「個 人の能力プロフィール」や「指導法の 効果プロフィール」を検討できる。 従って今後は、テストデータの分析 結果に基づいて、 効果的な指導法のあり方 個人差への対応の仕方 の2点について、研究を深めていき たい。(西 巖弘)</p>
<p>能登原 祥之</p>	<p>比治山大学 現代文化学部 助教授</p>	<p>【プロソディーを意識させる】 ステップアップ・プログラムに基づく科 目と活動内容の有機的なつながりの 中でもとくに「音読」がうまく取り入れら れている点と、授業の中で「日本語」が 効果的に使用されている点が印象的 である。「音読」については、生徒の声 の大きさや発音の点では評価できる。 さらに今後は「プロソディー」に注目し て、これを意識させた活動を工夫して 実践することで、「音読」の持つ学習効 果が一段と上がると考える。</p>	<p>「音読」の活動を通じて、生徒をどう 育てていくかについては、今後重点的 に検討を加える必要がある。 そもそも「音読」と「暗誦」の陶冶には 「発音の正確さ」「抑揚・リズムの適切 さ」と「発声の流暢さ」の3側面が考え られる。そして「抑揚・リズムの適切さ」 に対応する「プロソディー」は、さらに 文意の適切な「理解」と「表現」に繋が る大切な側面である。 しかし「プロソディー」は、これまでの 取り組みでほとんど考慮していない。 従って、今後の指導の中に計画的に 導入して、「プロソディー」の指導を含 む効果的な方途を開拓したい。(西 巖弘)</p>

## 9 外部講師の講演、授業外活動等の記録

---

### (1) ユーロスカラシップ(国際コミュニケーションコース修学旅行) 【資料3 - 1】

時期 平成17年5月6日(金)～5月17日(火) 11泊12日  
場所 フランス ストラスブール  
対象 広島市立舟入高校学校普通科国際コミュニケーションコース2年生40名  
ユーロ会議にアジア諸国の代表として参加し、スピーチとプレゼンテーションを行った。

### (2) 国際交流宿泊研修 【資料3 - 2】

時期 平成17年7月21日(木)～7月23日(土) 2泊3日  
場所 国立江田島青年の家  
対象 広島市立舟入高校学校普通科国際コミュニケーションコース1年生41名

### (3) 高校生英語セミナー 【資料3 - 3】

日程 平成17年8月10日(水)～8月11日(木)  
場所 広島市立舟入高等学校  
対象 広島市立高等学校に在籍する高校生

### (4) 舟入高校主催英語スピーチコンテスト 【資料3 - 4】

日時 平成17年11月5日(土)9時30分～12時30分  
会場 広島市立舟入高等学校 国際コミュニケーションホール  
対象 舟入高等学校生徒および広島市内の中学生

### (5) SELHi 特別講演会 【資料3 - 5】

目的 英語教育の各分野における著名な講師の講演に参加することを通して、英語を「書くこと」・「話すこと」に対する積極性を高め、英語によるコミュニケーション及び英語の学習に対する前向きな態度を養う。

日時 平成17年10月21日(金)

場所 広島市立舟入高等学校 国際コミュニケーションホール

講師 青木 信之 先生 (広島市立大学 副学長 国際学部 教授)

演題 『英語ライティングが上達するためには何が大切か』

対象 国際コミュニケーションコース1～3年生

(1) 本年度(第二年次)の研究開発を踏まえて、今後この研究成果を普段の授業にどのように生かしていくか

### 〔1〕本年度(第二年次)の研究開発からわかったこと

平成17年度(第二年次)の本校におけるSELHi研究開発では、「実践的研究の期間」と位置づけて、第一年次に構築したステップアップ・プログラムとシラバスに基づいて指導を行い、どのような活動を行うことで生徒の発信能力の何がのばせるのかを追求した。

結果として、すべての学年において、ライティングとスピーキングの「総合力」と「流暢さ」の伸びが著しかった。このような利点に結びついた事柄をまとめると以下の3点が挙げられる。

「トレーニング型」の学習活動 「トレーニング型」の学習活動をすべての授業ですべての時間に行うよう体系的にシラバスを構成して実践した点

「流暢さ」の追求 「流暢さ」の側面を中心として、限られた授業時間内で行う活動に関して、「時間的な負荷」を与えながら発信能力を高めていった点。

「数値」による「評価」 「流暢さ」のWPM値など、日々の活動において力の伸びをモニターできる指標をポートフォリオによって生徒と教師で共有した点。

### 〔2〕次年度(第三年次)以降に向けて考慮すべきこと

一方、それぞれの授業の運営の仕方には、今後も工夫を徹底すべき点があり、平成18年度(第三年次)の研究においては、以下の3点を考慮する必要がある。

「即興性」を確認する手段の確立 生徒が「即興的に」話す力をつけていることは、研究授業やWSAテストによって伺えるが、最終的にはWSAテストから「W」を切り離すことで、全くの即興であるということを証明する必要がある。

「テキスト」と「教材集」の制作 平成17年度(第二年次)までの取り組みは、相当の効果が認められたが、この効果ある取り組みをSELHi後も持続させるために「テキスト」と「教材集」を残しておく必要がある。とくに1年生の「オーラル・コミュニケーション」、2年生の「英語表現」、3年生の「コミュニケーション」は、ステップアップ・プログラムの中で各学年の中心となる学習活動を扱う科目なので、今後の普及を考える上でもこれらの指導内容をテキスト化する意義は大きい。

「個人差」への適正な対処 WSAテストで示されるプロフィールに基づいて、それぞれの生徒に対する対処を施す必要がある。そしてどのような生徒になにを重点的に指導するかという問題に対して、SELHi研究開発を通じての最終的な解答をだす必要がある。

〔 3 〕 第三年次の研究計画

今年度以降の研究及び研究成果の普及に関する計画		
研究内容	研究方法	研究評価方法
(1)ライティングからスピーキングへの移行を図る指導法の研究	おもに1・2年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年次に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における「形成(Formation)」および「創造(Creation)」の各フェーズの指導を実践する。  研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。 1) 授業における「指導メソッド」の一層の進化 2) 「個人差」に対する適正な処遇 3) 時間と教育資源の「効率化」を図る指導形態	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	WSA テストによる「流暢さ」、「適切さ」、「正確さ」の各指標の測定。 生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」  「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(2)スピーキングから議論活動への移行を図る指導法の研究	おもに3年生を対象として、新しいシラバス(研究の第二年次に修正と精緻化)に基づいて、「ステップアップ・プログラム」における「加速(Acceleration)」のフェーズの指導を実践する。  研究の最終年度として、とくに以下の3点での発展を試みる。 1) 授業における「指導メソッド」の一層の進化 2) 「個人差」に対する適正な処遇 3) 時間と教育資源の「効率化」を図る指導形態	生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	学期ごとに、各能力の測定・評価をする	WSA テストによる「流暢さ」、「適切さ」、「正確さ」の各指標の測定。 生徒及び教師による、指導・活動の自己評価と内省の報告
	測定・評価の結果に基づき、指導法の適否を検討する	指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」
	上記(1)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにし、研究を通して洗練化された指導方法ならびに「ステップアップ・プログラム(これに関連するコンピュータ・プログラムなどの教材・装置等を含む)」の完成を以て、研究全体の成果とする	指導に因る生徒の WSA テストにおける「パフォーマンスの変化」と「目標値の達成度」  「ステップアップ・プログラム」と、それに関連する教材・装置の完成度
(3)指導評価シラバスの開発	研究の第二年次に改訂したシラバスおよび評価規準(総合的・科目ごと)に基づいて、教師による指導と生徒による自己評価を実践する	科目ごとのシラバスの目標に対する適合度
	上記(3)の に基づいて、科目ごとのシラバスの目標への適合度を検証・検討する	
	上記(3)の に基づいて、改善された点、さらに課題とすべき点を明らかにするとともに、科目間の系統的なつながりを備えたシラバス及び評価方法の完成を以て、研究全体の成果とする	研究の第3年次の「指導の成果(生徒のパフォーマンスの変化)」と「目標値の達成度」  体系的な指導・評価シラバスの完成度